話題の十字路

実現の鍵は〝多目的〟

ソフト面の戦略も必要

「米沢スポーツ・ビレッジ」構想

10/6 山新

米沢市南原地区に、人工芝のサッカーグラウンド三面を中核にしたスポーツ活動拠点を整備する「米沢スポーツ・ビレッジ」構想は、提唱団体の推進会議（種村信次代表）が展開した活動で約二万五千人分の署名が集まり、大きな反響を呼んでいる。半面、整備費用をどう確保していくかなど、実現に向けた課題は多い。市民の理解を得るには、サッカー施設に限定せず、市の生涯スポーツの推進拠点としての位置付けも必要となるだろう。

推進会議は、六月から三カ月間で集めた二万五千八十七人分の署名簿を添え、構想の早期実現を求める要望書を市に提出した。二〇〇八年度からの市まちづくり総合計画第二期実施計画に構想を盛り込んでもらうのが狙いだ。

米沢スポーツ・ビレッジ構想は南原地区、米沢地区サッカー協会、特定非営利活動法人（NPO法人）夢創工房など五団体が推進会議を組織し、提唱している。米沢南工業団地内の遊休地に、人工芝のサッカーグラウンド三面、更衣室やシャワールームを備えたクラブハウス、照明などの整備を求めている。

置賜は県内で唯一、芝生のサッカーグラウンドの未整備地域で、特に少年期の技術力育成の面で立ち遅れが懸念されている。推進会議では、構想が実現すればこうした課題が解消されるほか、県内や東北レベルの大規模大会のイベント招致が可能となり、経済効果も大きいと訴える。

最大の課題は、厳しい市の財政事情の中で、整備費をどう捻出（ねんしゅつ）するかだ。人工芝のサッカー場を整備するには一面で二億円近い額が必要といわれる。福島市の十六沼公園に二〇〇六年二月にオープンした

2万5087人の署名簿を添え、米沢スポーツ・ビレッジ構想の早期実現を要望する推進会議のメンバー（左）＝米沢市役所

サッカー場（人工芝二面、土二面、夜間照明付き）の整備費用は約三億八千万円。現構想にあるすべての施設を整備するとなると、六億―七億円の費用が必要となる計算だ。

サッカー競技者だけが使用する施設では、巨額の投資に理解は得られない。天然芝よりも降雪地向きといわれ、高い使用頻度にも耐えられる人工芝のメリットを生かし、平日や夜間は軽スポーツなどで使用できるーというように、生涯スポーツ振興を目的とした多目的施設にできないものか。

単に〝ハコモノ整備〟に終わらせないために、構想段階であったとしても実現後を見据え、運営方法についても検討する必要がある。手法の一つとして総合型地域スポーツクラブによる自主運営方式も検討すべきだ。

総合型地域スポーツクラブは、競技、世代、年代、技術レベルの三つの多様性を持ち、地域住民が自主的に運営する非営利的な組織を理念としている。地域のスポーツ振興はもとより、世代間交流などの新たな地域コミュニティー形成も期待されている。

構想推進に向けた活動をより実現可能なプランにしていくには、ハードばかりでなく、ソフト面での戦略練り上げが必要ではないか。

（米沢支社・佐藤正則）